

スポーツ施設と宿泊施設の連携による地域課題の解決

— サッカータウン波崎・和倉温泉 —

(公財)えひめ地域政策研究センター

研究員 渡部 卓

＜サッカータウン波崎＞

茨城県神栖市にある波崎地区は、「サッカータウン波崎」というキャッチコピーを掲げ、大小併せて約70面の天然芝のグラウンド（内4面は日本サッカー協会公認人工芝）が集積している。その他、野球場16面、フットサル場14面、体育館、アーチェリー施設などもあり、年間を通して使用可能なスポーツ施設が集積している地域は、全国的にも珍しい。特筆すべきは約70面の芝のグラウンドが集積している点と、グラウンドの所有者である。4面ある人工芝は市営施設であるが、その他の天然芝は民間所有である。しかも地元旅館業協同組合に加盟する20軒の旅館のほとんどがグラウンドを所有しており、自ら大会を企画したり、合宿の募集をしたりして集客に努めている。

神栖市は人口約9万4千人で、茨城県の東南端に位置し、利根川をはさんで千葉県と接しており、工業の玄関口鹿島港と波崎漁港があり、工業と漁業のまちである。

「サッカータウン波崎」としての取り組みはJリーグ発足当時、アマチュアの為の芝生のグラウンドを作ろうということから始まった。それまでの波崎地区の旅館には、夏の海水浴客と、工業地帯に出張で訪れる客のみであった。しかも、日帰りの海水浴客が増加し、宿泊客の減少に歯止めがかからない状態となっていたが、タイミングよくJリーグのサッカーブームが到来したのをきっかけに「サッカータウン波崎」を目指すこととなる。

波崎地区には年間約30万人がサッカー大会や合宿に訪れている。アクセスは成田空港から約30km、東京からは100km圏内であり、関東自動車道利用により約1時間40分。東京からのアクセスの良さと比較的温暖な

気候もあり、茨城県内だけでなく、茨城県周辺からの利用客も多い。ピーク時には選手、保護者、関係者を含めると波崎地区20件の旅館の収容人数4,200人を大幅に超えてしまうので、周辺の宿泊施設を利用せざるを得ない状況だ。



この集客力は、芝のグラウンドの多さというハード面と大会や合宿の企画というソフト面がマッチしているからこそと言える。一部の合宿や大会はスポーツイベント会社が「企画・募集・運営」を手がけており、独自のネットワークを駆使し合宿中のお互いが求める対戦相手のマッチメイクや、合同合宿のセッティングなど、他の合宿地にはない効率的で効果的な合宿が可能となっている。特に高校生年代のサッカーチームにおいて、参加チームのリピートも多く「合宿の聖地」の顔も持ち、加えて「裏の高校サッカー選手権」として、毎年年末から年始にかけて行われる全国高校サッカー選手権大会に出られない選手を対象にした大会も開催している。選手だけでなく保護者にとっても心に残る思い出深い大会となっており、

トップレベルの選手だけでなく広くアマチュアサッカーに貢献している。

神栖市内の住民にとってもプラスな面がある。グラウンド所有者は農家が中心で、芝生のグラウンドづくりは他の農作物に比べ体力的な負担も少ないので、高齢化が進む農家にとって好都合だ。加えてそのご老人たちがグラウンド整備をしながら、使用していない時間帯にグラウンドゴルフを楽しもうという試みが始まろうとしている。合宿や大会は繁忙期が決まっている。特に夏休み（7月下旬～8月）春休み（3月下旬～4月上旬）は忙しく、それ以外の時期、特に学校がある平日の昼間などは使用しないことが事前にわかっているので、地域のご老人たちの憩いの場に、波崎市民のグラウンドに対するロイヤリティを向上させたい考えだ。このように、「サッカータウン波崎」は「支えるスポーツ」と「するスポーツ」が見事に融合している。



＜温泉観光地と合宿の融合—和倉温泉—＞

石川県七尾市に4年前（平成20年）にオープンした「七尾市和倉温泉運動公園」（以下「和倉運動公園」という）は、名前のとおり全国的にも有名な温泉観光地の和倉温泉の宿泊機能を有効に活用しようということで作られた施設だ。元々和倉温泉周辺ではサッカーの合宿が盛んで、約10年前から高校生年代の「フェスティバル」という合同合宿形式を行ってきた地域で、選手及び指導者が年間約5,000人が訪れていた。しかし不思議なことに七尾市には、サッカーの強豪校もなければ、昔からサッカーが根ざしている土地柄でもない。天然芝のグラウンドが3面とクレー（土）のグラウンドが2面あるだけだ

が、それまで首都圏で開催されていた「フェスティバル」に参加していた強豪校が少しずつ参加するようになった。理由は、和倉温泉という宿泊施設の評判が選手や指導者の口コミで広がっていったためだ。

和倉温泉を訪れる観光客はピーク時の年間180万人が90万人に落ち込むなど深刻な状態だった。宿泊受入側としては年間5,000人の宿泊は可能であるが、グラウンドが足りないという事態が発生し、「和倉にグラウンドをつくれればもっと高校生は来てくれる」という機運が高まり、和倉温泉旅館協同組合等各種経済団体の働きかけ等もあり、和倉運動公園が完成した。

和倉運動公園には、国内唯一のFIFA（国際サッカー連盟）公認人工芝を敷きつめた、公認サッカーコート3面を配置。既存のグラウンドと併せて練習環境を整備した。

七尾市は人口約5万8千人で、石川県の北部、能登半島の中央に位置し、主に観光のまちである。アクセスは能登空港からは約40km、高速道路利用では、東京から約7時間、大阪から約5時間、名古屋から約4時間と、大都市圏から遠いにもかかわらず、利用客が増加傾向にあるのは、和倉温泉という宿泊施設に加え、日本にひとつしかない人工芝のグラウンドという恵まれた環境と、海からの風が心地よく、宿泊施設からも歩いて行ける距離に和倉運動公園が位置しているというコンパクトな合宿環境にあることだ。

魅力はハード面だけではない。和倉運動公園の指定管理を和倉温泉旅館協同組合が行っており、合宿の申し込み、グラウンド、宿泊、お弁当の手配及びマッチメイク（対戦相手の手配）などをワンストップで完結できる仕組みで、利用者として初めて訪れる場合でも安心だ。スタッフは3名で、その他の業務としては、和倉運動公園の管理やサッカー教室も行っている。

昨年度（平成23年度）は年間約2万人が訪れ、経済効果は少なくとも3億円と言われている。旅館業者としても、高校生の宿泊代金の平均は約7千円と低価格ではあるが、まとまった宿泊客が2～3泊するとあって稼働状況は上がっている。また、「高校生はさわやかで、接していても気持ちがいい。もっと高校生には来てもらいたい。」という旅館業者もあるようだ。

和倉運動公園建設の効果は、経済面だけでなく、小学

生や幼稚園の授業にも使われたり、当初は和倉運動公園の建設に反対していた近隣の人がベンチでよく観戦しており、「レベルの高い試合になるほど面白い」と高校サッカーファンになるなど、旅館業者のみならず一般市民にも欠かせない施設となり始めている。和倉温泉旅館協同組合のスタッフも、育成年代の選手に対して良い見本であるために、態度、身なり、言葉遣いには細心の注意を払うとのことで、ここ和倉は、「ハード、ソフト、ハート」が備わったまちを目指している。



<まとめ>

「サッカータウン波崎」「和倉温泉」の取り組みは、いずれも観光・宿泊施設の宿泊客の減少という地域課題をスポーツ施設と宿泊施設を連携させることによって解決しようとするものである。また、ただ単に施設を整備するだけでなく、「波崎」では旅館組合やスポーツイベント会社が大会を企画したり、練習試合の対戦相手のマッチングを行っている。「和倉温泉」でも、旅館組合がスポーツ施設の管理運営を行うとともに、合宿全般のマネジメントを行っている。ハード整備にソフト面を組み合わせるスポーツ振興、地域振興のあり方として、本県においても参考にすべき事例である。